

## はじめに

今回、中川徹先生の「TRIZ ホームページ」の従来の高原利生論文集に2020年2021年分の追加をしていただくことになった。それに際し、先生から2018年以降の経緯を含めた発表のまとめを依頼された。

今まで高原の書いた内容は、基本的に前の内容を含みながら、少しずつ全体に近づいてきた。その経緯を述べるため2003年以降の発表内容にも触れる。

ここでは、次の目的、機能を全て満たすための構成、構造を取ることにした。

(目的)

- ・今まで読んでいただいている中川徹先生や読者には、私の思考の原動力と変遷をご理解いただき、
- ・読んでいただいていない方には、私の論点の概要が分かり、
- ・私自身にも、今までの原動力と変遷の見直しができ、それが自分の問題点と改善すべき点の把握、思考の向上に繋がる。

(構成)

- ・思考の変遷が分かるため、今までの発表での進展経過をAに述べる。
- ・思考の原動力が分かるために、今までの先人の問題提起をBに述べる。

凡例:FITは情報処理学会と電子情報通信学会合同のフォーラム、IEICEは電子情報通信学会の大会、IPSJは情報処理学会の大会、TSはTRIZシンポジウム、CGKは情報、電気、電子関連の中国支部の連合大会。THPJは中川徹先生のTRIZホームページ。その後の2019等は発表年

## A. 概念と命題の変遷

紙の出版物として2019年に初版の「未完成の哲学ノート」と、これを2部に分けた「永久に未完成の哲学ノート」(第1部と第2部)の3冊がある。中川徹先生の「TRIZ ホームページ」で紹介していただいた。内容改善のための改版を重ねている。このため、論文発表数は少なくなった。

書いている概念、命題は、全て近似であり仮説である。今書いている仮説より良い仮説は、必ずあり、いつか必ずできる。これがいつまでも続き、いつになっても完成しないので「未完成の哲学ノート」「永久に未完成の哲学ノート」という名前にした。

事実をとらえるための **1 何か分かるとは何か**、**2 必要な前提**、**3 基本概念**から始まり、

**4 論理学**、**哲学**の見直し、**5 生き方**の見直し、

**6 今後の事実変更**の見直し、と進んできた、と後になって分かる。

3期に分けると次のようになる。

2003年から2007年までの検討では、基本概念(オブジェクト、粒度など)を明らかにし、あるべき姿と現実の差異解消の論理、方法、表示方法を追求した。2003年からオブジェクトとは何かをまとめるのに2年、オブジェクト変更の一応の定式化に3年かかった。

2008年から2012年までの検討内容は、(広義の)差異解消の論理の理論になった。(広義の)差異解消が(狭義の)差異解消(通常の意味の「変更」「変化」と両立であることは大きな発見だった。自然の運動、人間の行動、思考の全体は、内容的には、(広義の)差異解消、その論理である。

これをもたらすのは運動である。全ての運動を動的な構造面から見た近似が矛盾であ

った。矛盾を管理するのが論理的網羅思考である。これらの検討を続けながら、生き方の検討も 2009 年から始めた。

2013 年からは、矛盾、根源的網羅思考を構成要素とする弁証法論理、それが「生き方」と「生きる」ことを実現すること、それが最少概念で実現されることを検討している。

もともと、以前から、ゼロから少ない原理でなるべく単純に哲学（論理学と世界観）を作り直そうとしていた。ゼロからと言っても、当時の常識を変えようとしたデカルトと初期マルクス、二人の未完のノートから態度を学んだ。彼らと同様、今の常識、哲学を変えようとしている。しかし、なかなか変わらない。

## 1. 何かが分かるとは

何かが分かるためには、「何か」と、「分かる」ことが分からなければならない。

### 11. 「何か」とは**事実**、それを理解させる**論理**

「何か」とは**事実**である。事実をどうとらえるかが出発点である。

2004 年 2005 年の[FIT2004, FIT2005/1, FIT2005/2]を読み返すと、**ものと観念、存在と過程（運動）の両方**を、しつこく統合的にオブジェクト（後述）として扱おうとしていた。2006 年の[FIT2006]は、存在と過程の歴史の表示方法を提案した最初である。

その後の十数年進歩がなかった。この間の事実の扱いについての記憶がない。

2019 年 9 月の「未完の哲学ノート」4 版以降、事実とは、ものと脳の中の観念、存在と過程（運動）の両方からなる「あるもの」と確定した。「ある」「ない」の「ある」である。

更にこの時から、観念の中の固定的なものも存在と扱うようにした。否定的なニュアンスでとらえることの多い、いわゆる「固定観念」だけでなく、自分の中で一時的にせよ出来上がっている観念像を、全て「存在」と扱う。思考という運動がこの「存在」を変更し新しい「存在」にする。これでやっと、ものと観念、存在と過程を整合的に扱うことができるようになった。

FIT2004 を読み返すと、マルクス「経済学・哲学手稿」の言葉を引用している。「対象的、自然的、感性的であるということ、自己の外部に対象、自然、感性を持つということ、あるいは第三者に対して自らが対象、自然、感性であるということは、同一のことである」[経済学・哲学手稿] 対象的、自然的と感性的を、初期のマルクスは同じような意味で使っていたことに改めて気づく。

現実に、全ての人のその時の**感情的感性的判断**が、事実に対する今の行動を決めている。この感情的感性的判断も正しくなければならない。また、自分の正しい思考方法も、他人との正しい議論も必要である。この二つが、身に着いた論理を必要とさせている。これは今、ないに等しい。

身に着いた論理が、潜在意識、世界観、感情、感性、価値観を決める。そのため、本稿は、**論理**と、その全体像、体系である**論理学**（後述）を作ろうとした。2019 年[FIT2019]に、文法と形式論理の中間の論理学を作ろうとしたことを書いている。

昔の哲学は、**事実をとらえる概念**だけを述べているように見えるものばかりで、そのため私には難解である。「未完の哲学ノート」などでは、この**事実をとらえる概念**は、オブジェクト、粒度、網羅だけでよい。これを理解すると、全員の各年齢にあった、難解でない普遍的哲学ができる。

哲学（≒常識）は、論理学と世界観（+これらを扱う粒度などの最少概念）と考えている。これらに生き方を含めて、哲学と考えるほうがいいかもしれないが、分けて扱う。

一般には、**哲学≒世界観**という理解が多いと思う。それに対し私は、論理学が世界観を含み前提に置いて、**哲学≒論理学**であると考えようになった。「未完の哲学ノート」12 版 2021 年 3 月からである。

論理は、認識の場合であれ事実変更の場合であれ、それらの対象である世界像、世界観を前提に置いて、世界像、世界観も論理によって作られている。

誰かが、全ては、自分とそれ以外の世界からできているという単純な世界像を言うとする、その人は、今の自分とそれ以外の世界で全てが網羅されていると言っている。

1 この中には、単純ながら極めて高度の抽象と推論が入っている。抽象の結果が、自分とそれ以外の世界であり、推論は、この二つで世界が網羅されているという仮説設定である。抽象と推論の二つがどちらも論理の要素である。

2 世界像の集積が世界観である。世界観と論理の二つが哲学、常識の要素である。

この二つの、二つは同時に生成される。これは二つの入れ子の同時生成でもあるが、主導しているのは、それぞれ、1については推論、2については論理であると考え。1については、自分とそれ以外の世界で全てが網羅されるような推論のために、自分とそれ以外の世界という抽象がされている。言葉の遊びのようだが、この発見は大きかった。

おそらく、入れ子をはじめて作られるには、入れ子を構成する2項のどちらかが原動力になる。原動力になるのは必ず運動（上の場合、推論、論理）である。運動である論理と、存在である世界像があるが、論理が主導して世界観は作られた。個々の論理の集大成が論理学である。

## 12. 「分かる」とは本質と構造が分かること

何かが「分かる」とは、何かの本質と構造を把握することである。これが分かることの全てである。これは、「未完成の哲学ノート」14版（2021年5月）で初めて気が付いた。

構造は、構成要素とその関係である。

## 2. 必要な前提

### 21. 前提1：本質と構造の把握のための仮説、近似

本質と構造の把握のため、近似による単純化、仮説を作る態度と、事実把握のための概念（後述）を準備しておく。

複雑な事実を扱うため近似モデルで単純化する。

事実を、1 客観的事実、2 知覚した一次的情報、3 それを対象化した二次的情報と近似する。これが事実の必要な最小モデル近似である。2,3 の中の認識と働きかけ方の論理の分かる事実が、扱える対象である。

知覚した事実を対象化した二次的情報で述べる言説は仮説であり、その正しさは1の客観的事実、2の一次的情報により検証され、正しいかどうかは結果でわかる。

今より良い仮説は必ずでき、他により良い仮説も必ずある。この相対化の態度の何よりの利点は、自分が傲慢にならず、同時にあらゆるものの対象化ができることである。

正しい仮説は通用し続け、法則や常識、哲学になる。同時に、法則や常識≒哲学は古くなり続ける。故に、法則、常識≒哲学は変え続けなければならない。

### 22. 前提2：価値系列

「1種（オブジェクト）の存続、2個（人）の生物的生、3生（オブジェクト）の属性」という価値系列があり、この順に、大きさと共有の必要性が重要であることが共有されるべきであると思っている。おそらく2個（人）の生物的生だけが自明である。自分の今の生より大きな価値があることもおそらく全ての人に自明だと思うが、それが何かは各人によって異なる。自分の家族の存続、地球上の全ての生命の存続、地球の存在、宇宙の存続、

それととりあえず、人類の存続を、仮に、個人の生の上位にある価値としている。はっきりしないが、個人の生の上位にある価値は何かあるとしておく。

求めようとしているのは、（仮の）種の存続－個体の生という自明の実現価値に続く生の属性＝生き方の内容である。この内容の検討が本稿のテーマの一つである。2019年6月「未完成の

哲学ノート」14版で、この「生の属性」、生き方が得られれば「(仮の)種の存続」を究極の価値にしても良い可能性が生まれるのではないかと入れ子に気づいた。

大きく長い空間時間の価値が、小さく短い空間時間の価値の前提になっている。価値の中にも、より大きな価値から小さな価値に至る階層がある。[THPJ2015/1] [FIT2015] お金は対象化(と自由)だけの価値だった。

人の行為には、対象との向き合い方として没入行為や何かとの一体感を感じる行為のような一体化の方向のものと、設計のように何かを突き放して扱う対象化の方向のものとの区別がある。

自分が他のあらゆるものに「生かされている」という認識は必須である。それを前提に、まず自分と現在をありのまま認め、価値系列上の生の問題の次にある、人の、どう生きるか、**生き方**という**生の属性**についての根本的な矛盾がある。それは、人の可能性を開花させ世界を良く変えるための哲学、生き方の検討である。この**生の属性**、**生き方**の内容を検討しなければならない。

### 23. 前提3：歴史と論理の一致

文化・文明成立後の歴史と論理の近似的一致の、大雑把な根拠は、次のとおりである。

・1 事実の、歴史的積み重ねの把握、歴史的変化の把握、条件設定による推論から、それぞれ帰納、演繹、仮説設定が生まれ論理ができていく。歴史が論理の原型を作る。

・2 文化・文明成立後、徐々に論理が事実を作る歴史が続いていく。論理が歴史を作る。

・3 事実は、現実の目の前の存在、関係だけでなく、各人の観念世界の中の、事実の歴史や思考の歴史の記憶と、未来像、論理、感覚、世界観、価値観を含む。また、逆に各人の思考世界、観念、情報は、その事実を含むようになった。この入れ子が繰り返され、一つの客観的歴史的事実と、知的動物の個々の観念、情報は、何重もの入れ子になり、お互いに含み合う。1,2と併せ、歴史的事実と、観念、論理はお互いに似た内容になっていく。

### 3. 基本概念：オブジェクト、粒度、論理的網羅

事実から、扱う対象である(一つの又は複数の)オブジェクトを決めるのが粒度である。言い換えると、無限の情報量のある事実から、扱える情報を抽象化して抽きだすのが粒度である。粒度についてはじめて発表したのは2004年の[FIT2004]である。

オブジェクトと粒度は同時に決まっている。過去の哲学者にも、今の殆どの人にも、オブジェクトと粒度は同時に決まっているという意識がない。これが今の停滞の最大の問題であると思っていたが、この十数年進展していなかった。

同時に決まるのは、オブジェクトと粒度だけではなかった。

粒度だけでは不十分であることを2005年の[FIT2005/2]では密度という概念で補おうとしていた。

扱う粒度が正確であることの必要条件が、網羅された中から選ばれた粒度であることである。網羅概念の進展は2009年にあった。

「未完成の哲学ノート」初版(2019年3月)以来、**1.** オブジェクト、粒度、網羅という3つの概念から事実をとらえるようになった。

2009年のTRIZシンポジウム[TS2009]で、網羅について次のように書いている。

相対化、批判とは、今まで何が問われなかったかを問い、そして何が答えられなかったかを答えるために、これらの空間的、時間的網羅性を問うことである。

網羅とは、まず現実、目的、問題、解決策の全オブジェクト候補の空間が科学的に網羅されることである。さらに時間的かつ空間的多面的多層的に見るための視点の網羅性が必要である。

網羅性は根源性のどのレベルでも必ず必要であり、理想的にはそのどのレベルでも完全な網羅性が求められる。網羅性の階層ができあがる。

網羅性を問い根源的に問うための困難さは、何を求めるのか、何が問われなかったのか、全体像が分からないまま、網羅性、根源性を追求しなければならないことである。一般に何かを認識する必要があるのは未だ分かっていないゆえであるが、ここではさらに未だ分かっていないものの全体を問おうとしている。そのための姿勢、視点の検討は永遠に十分ではないであろう。網羅の対象が何かも見直され網羅されねばならない。

相対化と批判の対象は、とりあえず既存の観念であり、内容はその見直しである。  
(引用終わり)

2019年の[CGK2019]で、あらゆる物事を網羅的に扱うことを考えた。

2020年1月に中川 徹先生のご依頼で「未完成の哲学ノート」9版2021年1月(に相当する「永久に未完成の哲学ノート」)の説明に「論理的網羅：永久に未完成の哲学ノート 第一部第二部の 今」を書いた(下記のURLが示すウェブ内の文)。

<http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html>

この文中で、マルクス「経済学・哲学手稿」の二文(後述)と、論理的網羅に触れた。論理的網羅は、本稿の中心概念の一つである。

Roni Horowitz, "From TRIZ to ASIT in 4 Steps", [The TRIZ journal, <http://www.triz-journal.com/archives/2001/08/c/index.htm>, Aug.2001.] 中の例では、扱う複数のオブジェクトは、目の前の具体的場面から、容易に物理的に網羅される。そういう簡単な例が扱われる。しかし、目の前の問題に限っても、オブジェクトが物理的に網羅されることは少ない。今の地球上の人の名を網羅することは、実質、できない。網羅は難しい。

難しい時は、内部を分けて、全体を網羅するように部分に分けてみると分かってくる場合がある。今回は網羅を4つに分けている。それから論理的網羅が出てきた。「未完成の哲学ノート」9版2021年1月の時である。(以前、根源的網羅といってきた用語を、論理的網羅に変えている)この考え方を含め論理の原理にまとめた。

## 4. 論理学

### 4.1 論理学の要素：矛盾モデルと推論、推論の仮説設定への統一へ

弁証法論理の要素は、**1 矛盾モデル**または**関係命題**(後述)としての問題定式化(抽象化)と**2 推論**である。これは、実質、中川徹先生の「六箱方式」[『デザイン科学事典』, 日本デザイン学会編, 編集委員長 松岡由幸、丸善出版、2019.]と同じであることを、最近の「未完成の哲学ノート」で書いている。

中川徹先生の2005年発表の「六箱方式」は、本来、思考の論理である。中川先生は、この思考の構造を世界で最初に明示的に明らかにした。発想法、発明方法論は、全て思考全般の方法で、発想、発明に限らず、生活や労働、生き方の改善等、考えること全般に適用できる。

**1 矛盾モデル**は**関係命題**と等価であることを、「未完成の哲学ノート」6版(2021年1月)で述べた。命題は、内容から、オブジェクトの存在を表現する**存在命題**、その属性を表現する**属性命題**、**矛盾(運動、関係)**を表しオブジェクト間の関係を表現する**関係命題**がある。(常識とやや異なるが) **矛盾(=運動、関係)**を、変化、変更と、(通常の)両立矛盾、両立矛盾から分かれた**一体型矛盾**、の三つに分ける。

2 2020年[FIT2020]で、論理学を作る全体像を述べる中で、**推論**である演繹 Deduction、帰納 Induction、仮説設定 Abduction は、仮説設定 Abduction に統一できるらしいことを書いた。

2021年の[IPSJ2021]“通常の推論を仮説設定に統一する条件”、2021年の[FIT2021]でその改良をした。

「未完成の哲学ノート」11版、12版（ともに2021年3月）でも、演繹、帰納は、仮説設定に統一できることを書いたが、説明がうまくいかず17版（2021年10月）まで修正を続けた。説明に三つの言い方があり、三つの関係がまだスッキリしていない。2年近く取り組んでいることになる。

## 42. 歴史と論理の一致から、歴史が作る論理学へ

「未完成の哲学ノート」10版（2021年1月）に、本稿が前提としている歴史と論理の一致から一歩進み、**歴史が論理を作る**ことに進んだ。以下は引用である。

地球では、論理の歴史的結果の結実が、今の矛盾モデル（または関係命題）である。矛盾（運動）モデルに、以下の順に、後の高度な矛盾が、前のより基本的矛盾の上に積み重なりながら発展する構造ができた。客観的な自然における矛盾が、宇宙誕生後からあり、それに自律運動をする生命の矛盾、さらに人の意図的努力の矛盾が加わる。

（宇宙創成後）外力による**変化・変更**と（擬人的な）機能と構造の**両立矛盾**

→（生命誕生後）無意識の**一体型矛盾**（例：進化）。

→（知的生命誕生後）意図的変化・変更。

→（技術開始後）意図的な可能性と現実性の矛盾（機能の可能性が現実になり得る客観的事実とそれを意識する運動）、意図的な機能と構造の矛盾（機能を実現する構造を意識的に作る運動）。

→（農業革命、物々交換、制度・技術の文化・文明開始後）矛盾の発展した変形として、矛盾の二項の向上をもたらし続ける一体型矛盾として、意図的な対象化と（所有と帰属の）一方向一体化の一体型矛盾（機能と構造の矛盾と併存）。

→（今後）意図的な対象化と双方向一体化の一体型矛盾（機能と構造の矛盾と併存）。

この歴史のエッセンスが論理学になる。歴史の論理、その発展方向と蓄積の精髓が、今の論理、仮説設定の内容になる。（引用終わり）

20年来のテーマの久しぶりの進展である。2021年の[FIT2021]では、それを書いた。

## 43. 論理の原理

論理の原理をまとめている。二種の論理の原理がある。細かなオブジェクト操作の原理と粗い論理の全体原理である。前者は、今まで検討されてきた。本稿は後者を述べている。本稿のまとめといえるかもしれない。

論理の原理の一部に、客観的に相手を騙してしまう負の論理を最後にまとめている。世の中に通用しているのは負の論理ばかりである。

初期から徐々に書き加え、2019年の[CGK2019]、2020年のCGK2020などを経て今は9ページになっている。他の記述に対し、論理の原理は単に時間をかけて積み重なってできた。

## 5. 歴史と論理から作られる世界観、価値(観)が作る生き方

### 51. 哲学と生き方

2013年 [FIT2013] “世界構造の中の方法と粒度についてのノート”で次の内容を書いた。

地球との共存という大きな世界の課題解決から、発明、発見や人の日常生活に至る様々な目的を達成したい。その目的は、人間の生きて行く行動で実現される。

人間の「態度」と「方法」→「認識と行動」→「世界」というモデルがある。

「生きる」ことは、このうち、「態度」と「方法」という「生き方」および「認識と行動」という実際の「生きる」行為に分けられる。態度と方法の一般的構造を明らかにした。

本稿を書いている間、論理が自動的に動いて文章ができていき、思いもかけぬ結論が作られる体験を何度かした。今までにないことであった。

2016年の[FIT2016]“世界観,生き方,人類の未来のための根源的網羅思考と一体型矛盾”(原文は英文)で、弁証法論理が「生き方」と「生きる」ことを実現することを書いた。

扱う対象は、農業革命から250年前の産業革命を経て、今後の数百年に至る人類の生き方である。この時代以降、意識的に、世界を変えて生きて行こうとするリーダーが生まれた。この歴史を総括し、人類の一瞬の「生き方」をモデル化した。これは、人と世界を繋ぐ次の四つの層からなる近似モデルである。おそらくこのモデルの有効期間は、数千年前から今後100年後くらいまでであろう。

論文では、全体が一体化と対象化という概念で統一できた手段が、人類が、人類の生活をできるだけシンプルになるように、つまり使用エネルギーが最小になるようにする目的のためだったということ、しつこく矛盾と根源的網羅思考を使って説明しているが、十分ではない。

「未完成の哲学ノート」初版以来、**2.**「歴史と論理の一致」という仮説の前提、**3.**六千年前の所有の誕生が、物々交換、お金を生み、そのため、経済が発展し、人口が増え、その管理のため宗教や組織への帰属を生んだこと。所有と帰属は一方向一体化であること、**4.**対象化と双方向一体化(自由と愛)の統一の実現という目標、は変わっていない。

数千年の時間をかけ、使用エネルギーが最小になるようにしたのが歴史だった。この歴史から、対象化と一体化という二項の一体型矛盾が得られたのである。

今求められている今後の革命は、新しいエネルギー革命という技術革命と、今まで不十分で欠点の多かった対象化と一体化を一体型矛盾としてお互いがお互いを高めていく全員のための全員の制度革命の二つからなるであろう。対象化の価値が「自由」(対象を操作する力)であり、一体化の価値が「愛」(自分と相手、対象の全てを一体として同時に高める態度と行動の大きさ)である。

「未完成の哲学ノート」17版(2021年10月)で、次のことを追加した。

1. 常に**全体**を求める態度、歴史から学んだ論理の重要性を強調した。全体とは、より粒度(空間時間、属性)の大きな事実のより正しい真実、より大きな粒度(空間時間、属性)の価値である。

2. お金の所有だけの価値、所有を求めて戦争を生む組織への帰属の二つの弱点は、同時になくすしかない。そのためには、悪しき所有と悪しき帰属の一方向一体化を、双方向一体化に変えるしかないという、初版からの結論を再確認することになった。生まれるものは超所有と超帰属だが、いい名前がない。それが生まれれば、お金だけの価値と戦争は同時になくなり、双方向一体化が産む生き方が、現在の身近な問題、復讐、いじめ、労働疎外なども解決する。

「未完成の哲学ノート」12版2021年3月で、論理学が生き方を主導することを書いた。

既存の哲学、現代哲学によらず、知覚と、事実と人の関係の歴史蓄積だけに基づいて、少ない概念と原理によるシンプルで合理的、正確、厳密という点、時代に合った論理学という二つの利

点を持った哲学の骨子が得られる。

基本原理は、1 手段、方法として 11 事実と価値の全体を求める態度、論理的網羅、12 結果より論理重視、状態より過程重視、一体型矛盾、2 目的として対象化と一体化(自由と愛)の統一。条件変更だけでなく内容を根本的に解決する必要がある。対象化と一体化、自由と愛の統一は遠い目標であるだけでなく、今の問題を解いてくれる解でもある。

## 52. 哲学生成と生き方の同時過程

今から将来に向けて論理学と世界観を作り続け、これによる新しい生き方が、常に全体を求める態度(特に論理的網羅)と共に、対象化と一体化、自由と愛の統一を可能にし、復讐を超え、新しい価値と生き方を作り続ける。

論理を作っていく過程の中で、今の課題を明らかにし解決していく。同じことだが課題を解決しながら論理を作っていく。各人の哲学が生き方を作る。

## 53. さらに哲学生成と生き方と世界変更の同時過程

論理的網羅による仮説設定という論理学の積極的態度は、自分でやってみると身に着き、同時に、生き方、社会を作っていく原動力になる。論理学が主導して、哲学(論理学と世界観)、生き方、社会は、将来、同じようになる。これは、同時に今の世界の問題解決の基本原則でもある。**新しい論理学を作り哲学、常識を変え続けることが生き方になり、自分の生き方と新しい社会を作ることが同時になる。**2018年の[IEICE2018][FIT2018][CGK2018]はその発表である。

## 6. 二つの変更が必要

### 61. 意見の統合：1) 人の生き方、2) 長期の価値、論理について

11 右派、リベラル、左派の意見、価値の共有増加。論理の共有。

非宗教と宗教の意見、価値の共有増加。論理の共有。

12 「独裁」国、「民主主義」国の意見、価値の共有増加。論理の共有。

多様化は、論理、価値の共有のもとで発展すべきである。今は多様化より、前提となる共有が足りない。

2 これらに外部から作用する国連、G7、G20、WEF、DS 諜報網などとの意見、価値の共有増加、論理の共有。彼らがその前提としている人間像を超越する論理、哲学を持つ人間像を提示している。

日中米を含む全ての人が、日々、感性と論理、生き方を向上させて行き、社会制度も科学も芸術も技術も、地球と人類も、よりよくなり続ける基礎が得られ、将来、必要な全ての人の個性と社会毎の制度の多様な発展が、初めて可能な時代が来る。この実現には大変な努力を必要とする。過去の歴史から学んだ論理が根拠である。この論理と結論は常に見直しが必要である。

多くの人に無理、妄想と言われると思うが、客観的には今、人類史上初めてこれが必要で可能な時代になった。しかし実現は絶望的である。

### 62 長期と当面の個別事実の解決

世界に共通に、下記の優先度の高い順の実現を図る。

1. 世界を壊滅させ得る五百年に一度程度の小惑星衝突、大規模太陽嵐、巨大カルデラ噴火等災害の克服、

2. 民主主義実現、「東西対立」「国境」と戦争をなくし、お金だけが価値でない、全世界に共有されるポスト資本主義制度の生成、各人の生き方が確立していく中で身近な問題(復讐、いじめ、労働疎外など)の解決、

3. 同時に各人、各「国」の多様な展開。



文化文明誕生以来の数千年に一度の変革である。これは世界共通の問題である。

日本に特有の問題が大きい。「未完成の哲学ノート」17版第2部で、日本の三つの当面の重要課題を述べた。

1 次の南海大地震は2035±5年に起こり被害額百数十兆円/千数百兆円になるという予測がある。北海道沖地震もひっ迫している。今から急いで大規模な土木・建築を行わないといけな

2 基幹エネルギーは常時使えるエネルギーでなければならない。

3 新型コロナウイルス問題。

3の検討で新たに分かったことは、矛盾モデルの両立が、2項の場合でなく複数項の場合が実際には多いことである。複数の事実と複数の仮説の両立が今の常識と異なる結果を出した。これは「永久に未完成の哲学ノート 第2部」6版（（2021年12月発売予定））には書いたが、「未完成の哲学ノート」17版には、詳細は未収録である。

1 南海地震対処、2 エネルギー問題、3 新型コロナの三つに共通する問題は、必要な行政、財界、全政党、マスメディアの全体で、簡単な事実の把握、論理、重要な価値、の三つが絶望的に違っていることである。

マスメディアの報道、政府、自治体、政党はあてにならず、自分で仮説を作り論理的に考えていくしかない。しかも世界に新しい論理はまだない。

## B. 原動力：先人の問題提起と現実の問題

### 1. 論理的網羅

デカルト「精神指導の規則」は、三巻36規則からなる筈だった未完成のノートで二巻の途中までが残っている。

規則5「複雑で不明瞭な命題を、段階を追って一層単純なるものに還元し、然る後すべての中の最も単純なるものの直感から始めて同じ段階を経つつ、他のすべてのものの認識へ登り行く」

規則7「知識を完成するためには、我々の目的に関係ある事柄をすべて一つ一つ、連続的な、どこにも中断されていない、思惟の運動によって、通覧し、且つそれらを充分な秩序正しい枚挙によって総括すべきである」「直感すると同時に他に移り行く一種の連続的な想像の運動によって、幾度もそれらを通覧するであろう。そしてついには始めから終わりまで極めて速やかに移り行くことができるようになり、以って記憶の役割を殆ど残さずして事物全体を同時に直感すると見えるに至るであろう」[精神指導の規則]

全ての人のその時の感情、感性的判断が、今の行動を決めている。そのためにはこのデカルトが書いたことの一瞬の実現が不可欠である。この実現方法が課題であった。これが論理的網羅思考の始まりになったように思う。

### 2. 矛盾、生き方・世界変更

「論理的網羅：永久に未完成の哲学ノート 第一部第二部 の 今」の中でマルクスの未刊のノート内の文について書いた。（下記のURLが示すウェブ内の文）。

[http://www.ogjc.osaka-](http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html)

[gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html](http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html)

「人間が彼の対象のうち自己を失わないのはただ、この対象が彼にとって、人間的な対象あるいは対象的な人間となるときだけである。このことが可能であるのはただ、対象が人間にとって社会的な対象となり、彼自身が自分にとって社会的な存在となり、

**同様に社会がこの対象において彼のための存在となる場合だけである」** [経済学・哲学手稿]

この2文の意味は、何年も分からなかった。（「未完成の哲学ノート」「永久に未完成の哲学ノート 第一部」本文に説明あり）。この文が分かりにくいのは、目的達成が最初に静的状態で述べられ、解決の条件も2段の形の静的状態で述べられるだけで、矛盾の形で定式化されていないことにもよると思う。

彼は、この二文で、対象化と双方向一体化の統合の本質と、自分の**生き方**を作ることと**世界を変える**ことは同時にしかできないことの二つの内容を述べ、結果的に論理解と歴史解を統合した。ただし、彼もその後の「マルクス主義」者も、対象化と双方向一体化の統合についても、生き方を作ることと世界を変えることの統合について、その後これを展開できなかった。

中川徹先生の“社会の貧困の問題に TRIZ/CrePS でアプローチする：人々の議論の根底に、人類文化の主要矛盾「自由 vs. 愛」を見出した”，第12回日本 TRIZ シンポジウム, 2016. も人の生き方の検討である。

一方「経済学・哲学手稿」には、矛盾についても考察があり、マルクス、エンゲルスのドイツイデオロギーでは、条件から矛盾にいたるプロセスが述べられる。マルクス、エンゲルスを受けて、TRIZ のアルトシュラーは矛盾概念を拡張した。これを受けた中川先生の“TRIZ のエッセンス－50 語による表現”]は、矛盾概念の要約でもある。

## 後書き

中川徹先生に、執筆を依頼されて以来、意外に時間がかかった。その中で分かったことがいくつかある。

1 ものごとをとらえる枠組みと概念は、少し変えると全体が変わる。少し変え、全体を調整し、また少し変え、という繰り返しだった。

その「少し変える」きっかけは現実の問題解決だったことが多い。現実の問題といっても、退職以降、技術者ではなくなったので、第2部のような政治経済の問題が多い。政治経済に全く疎いので、ゼロから考えなければならなかった。多くは常識から遠い解が出るので、賛成してくれる人がいないという欠点がある。

2 大きな問題は、概念、命題の変更履歴の歩みがあまりに遅いことと、内容が全く普及していないこと、事実が悪化の一途を辿っていることである。

全てが解決する答えは9割方できたという気がするが、この1,2年は絶望の度合いが進んだ。絶望せず、全体に、もっと分かりやすく正確で短くし書かないといけない

終わりに、機会を与えていただき20年近くに渡り、常にご支援を頂いている大阪学院大学中川徹名誉教授に感謝申し上げます。